

シティポップ・リバイバルはいかに語られていくべきか
——日本ポピュラー音楽史における位置づけ

加藤賢(目白大学)

近年、シティポップは国内外で広く言及され、ピークを越えた現在はむしろ「定着した」感すらある。その語りはメディア報道から SNS 上の批評、アーカイブ再評価、さらには海外アーティストによるカバーやサンプリングにまで拡散し、単なるブームを越えた文化現象として持続している。こうした国際的な再評価の背景には、YouTube や Spotify を中心とする配信インフラの整備、アルゴリズムによるリコメンド機能の発達、そして聴取行動の越境化がある。しかし、その規模や地理的分布、聴取の持続性については、歴史的文献や批評的議論に依拠した定性的分析が中心であり、実際の聴取行動を数量的に検証した研究はきわめて限られている。本発表は、こうした言説中心的研究の補完を目的とし、デジタル時代のプラットフォーム上における聴取の可視化を通じて、シティポップ・リバイバルを日本ポピュラー音楽史の中に位置づけ直す試みである。

具体的には、Google Trends による検索インデックスの推移を起点に、YouTube API から取得した主要楽曲（例：「Plastic Love」「真夜中のドア～Stay With Me～」）の再生回数データ、Spotify のチャート履歴および地域別リスナー統計を突き合わせることで、オンライン上における関心の時間的・空間的分布を再構成した。さらに、Apple Music や Spotify 上の代表的プレイリストを対象に、収録曲の変遷を内容分析し、どのような楽曲群が「典型的シティポップ」として再編されていたのかを検証した。これらの指標を組み合わせることで、「どこで」「どれだけ」「何が」聴かれたのかを立体的に可視化し、ブームの発火点から地理的拡散、定着への移行過程を描き出すことを目指す。

こうした観察の途中経過からは、欧米圏において特定の楽曲が比較的高い注目を集める一方で、東南アジアや中南米などではより多様な楽曲が並行的に聴かれている可能性が示唆される。これらの傾向は今後の分析によってさらに検証されるべき課題であるが、少なくともシティポップの聴取が単一の地域や曲群に限定されないことを示唆している。このような地理的広がり、従来「日本発の音楽輸出」として語られてきた構図とは異なり、プラットフォームを介した非中央集権的な聴取の自律的拡散を示す兆候として注目される。すなわち、シティポップ・リバイバルは、日本のポピュラー音楽が海外で日常的に聴取されるようになっていく過渡期における、初期的かつ特異な現象として理解されるべきである。本発表はこの観点から、シティポップを「輸出された日本音楽」としてではなく、「ネットワーク化された音楽流通」の中で再定位することで、プラットフォーム化以降の流通・受容史を再考するための視座を提示する。